

# みえない雲

2007(平成19)年2月26日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



監督＝グレゴール・シュニッツラー／原作＝グードルン・パウゼヴァング『みえない雲』(小学館文庫刊)／出演＝パウラ・カレンベルク／フランツ・ディンダ／ハンス＝ラウリン・バイヤーリンク／カリナ・ヴィーゼ／リッチー・ミュラー／トーマス・ヴラシーハ／ガブリエラ・マリア・シュマイデ／ジェニー・ウルリヒ／クレール・エルカース(シネカノン配給／2006年ドイツ映画／103分)

……「もし、北朝鮮から核が打ち込まれたら……？」という議論がタブーなら、「もし、原発事故が起こったら……？」という議論も、できるだけココココとやるのが日本流……？ それに対して、ドイツでは1987年のチェルノブイリ原発事故直後に『みえない雲』が出版され、今それが映画化されたのはさすが！ しかもそんな社会問題を、韓流ドラマとは大きく違う若い男女の純愛の中で描いたところが面白い……。豊かな髪の毛をすべて切り、頭をそりあげた姿で登場するヒロインの姿に感動することまちがいなし！ 日本でも、こんな骨太作品の登場を期待したいが……。

## さすがドイツ！ きっちりこういうテーマも……

日独伊の三国同盟が、米英仏蘭＋ソ連・中国を中心とする連合軍に敗北したことは歴史的事実だが、日本とドイツの戦後復興のあり方には大きな相違がある。ナチス・ヒトラーはともかく、ドイツ人やドイツという国がヨーロッパの中でも優秀で模範的な国であったことは、れっきとした歴史上の事実であり、それは戦後も同じ……？ 東西ドイツの分断という不幸を乗り越えて今日のドイツに至ったのは、その優秀さの賜物というべきだと私は考えている。

原子力発電の是非をめぐる議論は世界共通の課題だが、多分その方面の議論や対策が1番遅れているのが、旧ソ連や中国であり、ドイツはその点はもちろん、環境対策では日本以上に世界の優等生。

ソ連のチェルノブイリで原発事故が発生したのが1987年だが、その直後に発表され大きなセンセーションを巻き起こしたのが、グードルン・パウゼヴァング原作のベストセラー小説『みえない雲』とのこと。この映画はドキュメンタリー作品ではなく、ドイツのシュリッツで発生した原発事故の中で生まれた、若い男女の純愛を描くもの。

### 『みえない雲』 vs. 『黒い雲』 ……？

世界で唯一の被爆国である日本では、8月6日に広島で、8月9日に長崎で原爆慰霊祭が開催されているが、核保有国が増大するにつれて、また原水爆禁止運動の参加者が次第に高齢化するにつれて、少しずつそのインパクトが弱まっているのは否定できない……？

私は最近、広島原爆ドームと広島平和記念資料館を2度見学する機会があり(2006年10月16日、2007年1月26日)、広島に投下された原寸の原子爆弾と原爆投下後に降った黒い雨の様子をつぶさに見学した。さらに、新藤兼人監督の『原爆の子』(52年)で有名になった佐々木禎子さんの悲惨な姿や、原爆による放射能が示すさまざまな悲惨な姿を見て、あらためて原水爆禁止の必要性を痛感したものの……。

しかし、そんな私においても、「黒い雨」が降る前の雲が迫ってくる恐さについては、この映画を観るまでは全く実感できなかった。この映画のタイトル『みえない雲』とは、そういう恐ろしいもの……。

ところで、この映画はドイツ映画祭の2006年の出品作品で、原題は『DIE WOLKE』(雲)。そしてもともと邦題は『黒い雲』だったが、それを今回『みえない雲』に改題したとのこと。しかし私は、『みえない雲』より『黒い雲』の方がピッタリだと思うのだが……？

### 位置関係がわからないのが残念……

この映画のヒロインとなる主人公ハンナ(パウラ・カレンベルク)とその母親パウラ(カリーナ・ヴィーゼ)、弟ウリー(ハンス＝ラウリン・バイヤーリンク)が住んでいるのは、美しい自然に囲まれたのどかで小さなまちシュリッツ。そん

なまちに、ABC 警報（核兵器・生物兵器・化学兵器による攻撃に対する警報の総称）が突如鳴りはじめたのは、エバースベルト原発の放射能漏れ事故を受けたものだが、残念ながらこのシュリッツとエバースベルト原発との位置関係がよくわからない。

また、たまたま母親のパウラがハンナとウリーを家に残し仕事で出かけていったのがシュヴァインフルトというまちで、エバースベルト原発のすぐそばにあるまちだが、これも位置関係がわからない。

さらに雨の中に倒れこんでしまったハンナが次に目覚めたのはハンブルク近郊の臨時診療所だが、シュリッツからハンブルクまでの距離感もわからないし、ハンブルクに住んでいるヘルガおばさん（ガブリエラ・マリア・シュマイデ）の家もどこにあるのかわからない。このように、ドイツ映画ではその地名や位置関係がわからないのが残念……。

## ハンナとエルマーの純愛の始まりは……？

ハンナが転校生のエルマー（フランツ・ディンダ）のことを意識しはじめたのは、ある日教室の中で先生からの質問に答えられないハンナに対してエルマーが助け船を出してくれたため。このエルマーはすごく頭のいい生徒のようだが、ハンナとマイケ（ジュニー・ウルリヒ）の2人が勉強をみてもらうため（という、マイケがつくった口実で……？）訪問したエルマーの家を見ると、彼はすごいお金持ちのボンボンのように。ところが、エルマーの誕生日における父親からのプレゼントやそれに対するエルマーの反応を見ていると、必ずしも親子関係はうまくいっていないよう……？

そんなエルマーがなぜ同じ教室のすぐ近くに座っているハンナに興味を持ったのか、そしてなぜ2人の仲が急速に進んでいったのかはよくわからない。しかし、図書館での偶然の出会い、教室を抜け出しトイレでの突然のキス、という経過の中、2人は互いに強く惹かれあうようになったのだが、この初キスの最中にABC 警報が鳴ったのは、何ともかわいそう……。ハンナとエルマーの純愛の始まりがこんな緊急時だったということが、その後の2人の純愛の行方のすべてを規定することに……？

## 突然すごいパニックに……

教室と学校はすぐにパニック状態となったが、それはまち中すべて同じで、黒い雲、黒い雨から早く逃れようとして道路は大渋滞。そして駅も大パニック。それに輪をかけたのが緊急時のニュース。混乱する報道の中、一方では、窓を閉め切って家の中にこもっておけという指示が出ていたことも混乱の一因……？「僕の車ですぐにまちから脱出しよう」というエルマーの提案にすぐに同調したいのだが、ハンナは、間の悪いことに自宅にいる弟ウリーを迎えに行かなければならない。

他方、車をとり家に戻ったエルマーは、車のキーがなかなか見つからないうえ、エンジンがなかなかかからないときた……？ そんなイライラが募り、緊迫感が次第に高まってくる中、2人は行き違うことになり、結局ハンナはウリーを連れて自転車で駅に向かうことに……。途中嫌がるウリーを何とか励まししながら、駅の近くまで来たのだが……。

## 目覚めたのは病院の中

近時『ポセイドン』（06年）としてリメイクされたかつての名作『ポセイドン・アドベンチャー』（72年）、そして『タワーリング・インフェルノ』（74年）などの有名なパニック映画はテーマをその一点に絞ったものだが、この映画も前半のハイライトは、ABC 警報が鳴った後、駅でハンナが倒れ込んでしまうまでのパニックを描くもの。

ハンナは自宅でエルマーの迎えを待つ間にやっと母親パウラからの電話を受けることができ、ハンブルクに住むヘルガおばさんのところに行くように指示されたが、パウラ自身は運悪く原発事故のすぐ近くのまちにいたから……？ そして、自転車で駅に急行していたウリーもその途中で……？ さらに、ハンナ自身も、自分を助けてくれた見知らぬ家族の子供たちを駅の中で見失ったり、一瞬エルマーを見つけながら混乱の中で再度見失ったりした挙げ句、遂に力尽き1人駅の前で倒れ込んでしまった。そのため、彼女の身体には放射能をタップリと含んだ雨が容赦なく降り注ぐことに……。

そんなハンナがやっと目覚めたのは、ハンブルク郊外の臨時診療所の中。この診療所は被爆した子供たちを受け入れる施設で、献身的な看護師のハンネス（トーマス・ヴラシーハ）たちの世話を受けてハンナの健康は徐々に回復していった。

また、ここでハンナが友達になったのが、同世代の女の子のアイシェ（クレール・エルカース）。このアイシェの髪の毛はまだ残っていたが、大量の雨を浴びたハンナは健康は回復したものの、あれほど豊かだった髪の毛は、ある日以降……？

### これぞ女優魂……

映画の冒頭、親友の女の子マイケと登校前に湖でひと泳ぎしているハンナを見ると、彼女は青春を謳歌している普通の女の子だということがよくわかる。ところが、髪が長く胸も大きい（？）そんな普通の女の子が、「みえない雲」に襲われ、「黒い雨」に打たれた結果、現れる症状は髪の毛が抜けていくという恐ろしいもの。『Dear Friends デア フレンズ』（07年）で、あの美人女優北川景子がごっそりと抜けていく髪の毛に驚いたのと同じように、ハンナの豊かだった髪の毛も……？

そして遂に頭髮が1本も無くなったが、映画後半の彼女は、すべてその姿でスクリーン上に登場する。もちろん、これはカツラではなく、現実にすべての髪の毛を切り、頭を剃ったもの。「これぞ女優魂！」と誉めてあげたい。ところで、彼女と対比して、北川景子チャンはどうだったの……？

### 2人の純愛は韓流とは大違い！

最近韓流純愛ドラマの人気の落ちているが、その原因の1つは、パターンが飽きられてきたため……？ そう考えると、この映画における、原発事故発生時の初キスから芽生えた2人の純愛が、次第にホンモノの愛に高まっていくパターンはきわめて新鮮……？

黒い雲と黒い雨によって被爆し、抜け落ちる髪の毛におびえ原爆症の恐怖と闘っているハンナの姿を見て、躊躇することなく自ら被爆病棟の中に入り、ハンナのそばで生活し始めたエルマーの姿を見れば、それだけでビックリ……。また、息

子連れ戻しに来た父親に抵抗して、あくまで病棟に残ると主張するエルマーに対して、心を鬼にして「あなたも出て行って！」と叫ぶハンナの心の中を思うと……？ まさに、これぞ純愛！

そして、今は診療所を出て、ヘルガおばさんの家で暮しながら大学に通っているハンナとエルマーがやっと再会できた姿を見れば、大いに拍手を送りたいもの。ともかく、そんな恵まれた環境(?)の中で2人の愛はさらに高まっていくことに……。

### しかし、現実とは……？

しかし、現実とは残酷なもの。はじめて2人が結ばれた夜、「私たちに時間はあるの？」と尋ねるハンナに対して、エルマーはきっと自信タツプリに「これからいくらでもあるさ」と考えていたはずだが、そのエルマー自身の身体には、ある日被爆者特有の湿疹が……。さあ、ここで下したエルマーの決断とは……？

それは、私の予想とは大きく異なるものだった。すなわち、彼がハンナに告げたのは別れの言葉で、「2日後に両親と共にアメリカに帰る」というものだった。そして、別れの日。表面上は平静を装っているものの、ハンナが心の中で泣いていることは誰の目にも明らか……。

ところが、エルマーがいなくなり空白の日々を送っていたハンナが、久しぶりに今も臨時診療所で治療を受けている友人のアイシェを訪れた際、アイシェから聞かされた言葉は、「エルマーは元気で治療を受けているよ」というビックリするものだった。驚いて病室へ走ったハンナだったが、なぜかそこにエルマーはいない。「もしや……？」と思って、あの日2人で過ごした屋上へ走ったハンナがそこで見たものは……？

### ラストに向けて……？

広島・長崎に原爆が投下された直後の惨状を見た専門家たちは、この土地には以降何十年も草1本生えないと断言していたことは歴史上の事実……？ 1987年のチェルノブイリ原発事故の後も、その土地には以降何十年間も人間が立ち入ることはできないと言われていたもの……。したがって、それはこのエバースベル

ト原発事故でも同じ。

しかしこの映画では、危険の度合いが1番低い第三地域については、やっと立入禁止の規制が解除されることに。そして、ハンナが住んでいたシュリッツのまちはこの第三地域にあるもの。すると、あの日自転車に乗ったまま車にはねられて死亡し、埋葬もできないまま草むらに放置された弟ウリーは……？

ハンナがずっと気がかりだったのは、そんな弟ウリーをきちんと埋葬しなければ、という思いだった。そして今やっとそれが実現できたのは、あの日、診療所の屋上から飛び降りる寸前だったエルマーをハンナの愛の強さによって思いとどまらせることができたため……。

力を合わせて簡略ながらもウリーを埋葬した2人は、帰りの車の中で幸せそうに……。もちろん、この後2人がいつまで生きることができるのか、それは神のみが知ることだが、どんな過酷な状況の中にも希望はあるもの。運転しているエルマーから、「少し髪が生えているのでは……？」と指摘されたハンナは、それを風になびかせると言って、車の屋根から上半身を乗り出し髪を風にさらしたが、その顔は希望でいっぱい……。

一方では、そんなハンナの姿とこれからも彼女を支えていくであろうエルマーの姿を共に喜びながら、他方では、日本で55基もあるという原発のあり方、そしてその事故時の対応を中心とした危機管理のあり方をしっかりと勉強しなければ……。

2007(平成19)年3月5日記